

今回は、2018 年 10 月 13, 14 日に行われた AACMD について、徳島大学大学院医歯薬学研究部（教授）の松香芳三先生に報告していただきます。

Asian Academy of Craniomandibular Disorders 参加報告

徳島大学大学院医歯薬学研究部 顎機能咬合再建学分野 松香芳三

Asian Academy of Craniomandibular Disorders (AACMD) が 2018 年 10 月 13, 14 日に台北で開催された。学会期間中、台北は曇天で、時々小雨が混じる天候であり、暑いことを予想していた我々は少し肩透かしを食らった感じであった。台北では交通機関の発達が目覚ましく、桃園空港から台北までは電車を利用すれば、40 分で行くことができる。



空港から台北までの電車内風景



Alex 大会長

AACMD は International Congress of Orofacial Pain and Temporomandibular Disorders (ICOT) の下部組織であり、American Academy of Orofacial Pain などの姉妹学会である。また、日本口腔顔面痛学会は AACMD の日本部会となっており、他にも韓国、台湾、フィリピン、インドネシアの学会が加盟している。過去には日本、韓国、台湾で 2 年に 1 回のペースで学術大会が開催されていたが、フィリピン、インドネシアが加わったことにより、最近では毎年開催されている。



Young Clinician Forum でのディスカッションと発表



学術大会の前日である 10 月 12 日（金）午後 Young Clinician Forum が開催された。これは、口腔顔面痛の臨床例を若手臨床家に呈示し、診断手順を学んでもらうものである。和嶋先生、大久保先生、村岡先生が症例を提示し、

5～6 名が 1 グループになり、3

グループでディスカッションしてもらった。私もお手伝いをしたが、この Forum に参加している若手の先生はしっかりとした考えを持ってディスカッションに臨んでいたようである。各グループの代表が 14 日（日）に診断結果を学会上で発表し、フィードバックを受けていたが、診断はほとんど間違いがなかった状況である。彼らを見ていると、口腔顔面痛の将来は明るいと感じることができた。彼らは今後、ファシリテーターとして参加することになるとのことである。

12 日の夕方にはビジネスミーティングが開催された。そこでの大きな決定事項としては、①各会員は The Journal of Oral & Facial Pain and Headache の冊子体の代わりに、オンラインによりアクセスできるということで、2019 年からの年会費は \$ 100 に引き下げられること、②学会名称



ビジネスミーティング風景

は AACMD から Asian Academy of Orofacial Pain and Temporomandibular Disorders に変更されることなどである。年会費が引き下げられたことにより、日本口腔顔面痛学会の会員の多くの先生が本学会に入会され、国際的に活躍されることを期待している。



学術大会風景

今年の学術大会の参加者は約 100 名であり、昨年のジャカルタ大会よりも参加者は少ない状況であったが、密なディスカッションが行われていた。まず、今村先生の Special Lecture 1 からスタートした。今村先生は Is Burning Mouth Syndrome a Neuropathic condition? のタイトルで、Burning Mouth Syndrome は Neuropathic pain であるのかなど、基礎と臨床を詳細に講演された。Special Lecture 2 では韓国の Q-Schick Auh 先生が Peripheral Pain Mechanisms in Temporomandibular Disorders と題して、基本的な知識を発表した。



今村先生の講演



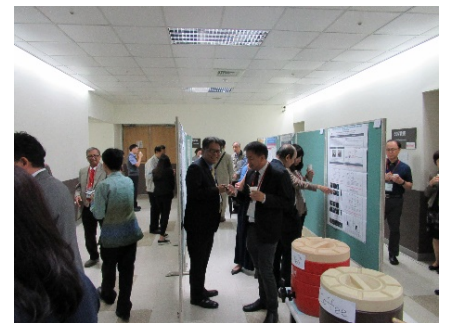
築山先生の講演

次に各国（日本、韓国、台湾、フィリピン、インドネシア）での学会活動状況が発表され、築山先生が日本口腔顔面痛学会の状況（ガイドライン、テキスト、多彩なセミナー開催、学術大会）を講演した。他の国の先生方はご自身の研究内容を発表していて、このセッションにおける発表内容のある程度の統一を図る必要があると考えられた。

今回の学術大会では、ポスター発表は講演の間の休憩時間に行われていたが、ポスター賞が設定されていなかったことから、ディスカッションが盛り上がら

なかったことは残念であった。それでも、各国の代表者は研究内容を熱く語っていた。

その後のシンポジウムでは Sleep Disordered Breathing in Asia, Orofacial Pain and Elderly Dysfunction in the Elderly, Idiopathic Condylar Resorption などがテーマとして発表された。その中で、松香が



ポスター発表風景



松香の講演



野間先生の講演

Sleep Disorders - Bruxism and Sleep Apnea in Japan と題して、睡眠時無呼吸の基本と日本での状況を話した。また、野間先生が Burning Mouth Syndrome and Ageing Population と題して、高齢者における口腔顔面痛の状況、Burning Mouth Syndrome に関する研究結果を講演された。

今回の学術大会に参加して、いくつかの感じられたことがある。①日本以外の国の多くの研究者・臨床家では口腔顔面痛とは言え、顎関節症がメインターゲットになっているので、口腔顔面痛の広い展開が期待される。②基礎研究に関連する発表が非常に少ない状況であるので、基礎研究にも目を向けて頂きたい。③今回の学術大会の準備開始が非常に遅く、周到な準備とは言えなかった。④学術大会のスタート時間が平気で遅れる、発表時間が 10 分間延長しても気にせずに発表しているし、座長からの注意もない。私とは違う時間が流れているようであった。⑤日本人は下手な英語かもしれないが、躊躇なく話すことが大切である。などである。若手の先生には

奮起して頂き、日本口腔顔面痛学会が世界をリードできるようになることを期待している。

2019 年はフィリピン、マニラで 10 月 19, 20 日に開催される。また、2022 年には ICOT と合同で日本において学術大会が開催されることが決定している。口腔顔面痛学会と AACMD は密な関係にあるので、多くの先生の学術大会への参加ならびに発表を希望している。



Gala Dinner に参加した日本人グループ



台北市風景

日本口腔顔面痛学会 News Letter へのお問い合わせは

「日本口腔顔面痛学会事務局」まで

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷株式会社学会事務センター内

TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960 E-mail: jsop-service@onebridge.co.jp